

AV JOURNAL

1987年10月 第12号



〈スタジオ調整室にて〉

目次

「海外放送受信システム」について……視聴覚教育委員会委員長 乙政 潤…	2
海外放送受信システム全体概念図……	4
「外国人のための日本語・日本文化夏期公開講座(1987年)」を ふりかえって……	山口 幸二… 5
私家版『大連日記』……	林田 雅至… 8
「ビデオ教室・名作ビデオ鑑賞会」について……	11
〈LL便り〉過去3ヵ年のAV資料の利用状況について……	12
テープライブラリー、LL自習室利用状況統計表 (1986年4月～1987年3月)……	14
1987年度LL授業時間割表……	16

「海外放送受信システム」について

視聴覚教育委員会委員長 乙 政 潤

視聴覚教育委員会が昭和63年度概算要求の特別設備費として要求しておいた「海外放送受信システム」が認められ、実施されることになった。本学の視聴覚教育について長期の見とおしをたて、施設・設備の拡充をはかってきた委員会として、まことに喜ばしい。その間の経緯や委員会の考えを述べ、より多くの方々の理解と支持を得たい。

「第三次5ヶ年計画」

委員会には「5ヶ年計画」という言い慣らわした言葉がある。それは外大における視聴覚教育を、5ヶ年を一区切りとして長期的な計画のもとに拡充していこうという考えである。昭和53年度から始まった。昭和53年度から57年度までが第一次、昭和58年度から62年度までが第二次である。

第一次の計画では、移転を契機として、力点はL教室・自習室の拡充と新設スタジオの基礎設備に置かれた。これに対し、第二次の計画の重点はむしろビデオ関係とスタジオの能力向上に向けられた。これらの計画の遂行は財源的には各年度の概算要求の特別設備費に依っている。

第二次5ヶ年計画もほとんど遂行された時点で、委員会が第三次の計画をたてるにあたって眼中に入れておくべき目標は三つあった。一つはこれまでの二次にわたる5ヶ年計画によって作られた設備の更新と補充である。二つには視聴覚教育施設・設備を重要な手段とする「センター」の設置である。三つには「海外放送受信設備」である。

さきの二つは互いに関連している。もし「センター」の設置が認められれば、第1の目標は無用となる。しかし、「センター」の設置が一朝一夕に認められるとは思われない。そこで第3の目標が優先されることとなった。折しも神戸市立外国語大学は、われわれに先んじてパラボラアンテナを設置し、海外放送の受信を開始した。

このように「海外放送受信システム」は、委員会の長期の見とおしの下に起草された。それが第三次5ヶ年計画の目標の一つに上っていたのは、委員会

の次のような考えによっている。

リアルタイムの映像

外国語授業のための教材や資料としてビデオテープは、ここ数年のあいだにだんだんと他のメディアによる教材・資料を凌駕しはじめた。それはビデオが外国に関するリアルな視聴覚資料だからである。それでは、なぜ外国に関するリアルな視聴覚資料が必要なのだろうか。

答は端的に言えば、外国語を学ぶにあたって、その国の人々がどのような顔をしていて、どのような服装をしていて、何に笑い何に泣いているかを知らずして外国語を学んだとは言えないからである。

大阪外国語大学に視聴覚教育施設・設備を置く究極的な目的は、外国に関するリアルな視聴覚資料に日常的に接することのできる環境を作ることにあると委員会は考える。それはまた委員会の任務の一つでもあると考える。

日常的ということは、学内にどこへ行っても接することができることであり、誰しも珍らしいとも思わず、あつて当りまえと思うということである。その意味では、われわれの大学で外国のリアルな視聴覚資料が周りに日常的に見られるとはまだまだ言い難い。

委員会が、受信した海外放送を各共同研究室ばかりでなくて、他にも学内で人が集まる可能性のある場所——学生控室や非常勤講師控室にも受像器を置こうとしているのはこの理由による。しかもそこに映るのが、現地で作られた、往々にして現地で作られつつある——つまりリアルタイムな——映像であ

れば、なんとすばらしいことだろう。

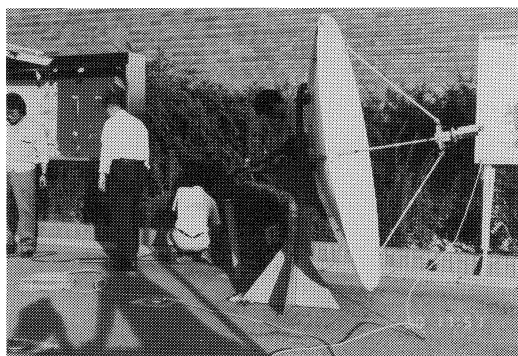
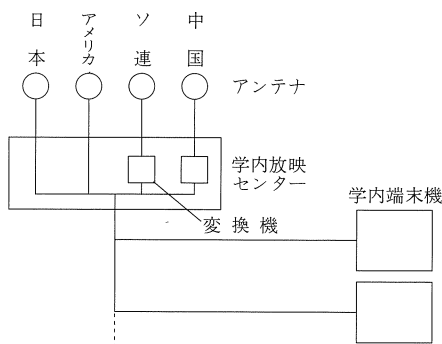
受信から自主放映へ

委員会が考えているのは、アメリカ、ソ連、中国のそれぞれの海外向け放送を受信して学内に流すことである。ここへNHKの24時間放送をも加える。いずれも人工衛星を仲介として受信するのであるから、パラボラアンテナが必要となる。

四つの放送を受信するのに4基のアンテナが必要となる。しかし、それぞれは最適の方向と据付位置が異なる。2基は附属図書館の屋上に据えつけられるが、他の2基は附属図書館のまわりの地上に据えつけられる。

4基のアンテナで受信した放送を図書館内の一ヶ所にまとめた上で学内に流すことになる訳だが、その際に、解像方式のちがいがから、ソ連と中国の放送はパル方式に変換しなければならない。

以上のシステムを概念図で示すと下のようになる。



〈衛星放送受信のための事前調査風景〉

学内へ流すためにはブースターによって電波を強めなければならないが、それらは図では省いた。学内端末機が4つの放送をチャンネルによって選択できるのは言うまでもない。

これだけでは、放送を受け取って流すにすぎない。せっかく学内に配線をするには勿体なすぎる。そこで委員会が考えたのは、同じ配線網を利用して、自主的に学内放送センターからビデオを流すことである。また、ビデオを流す代りに、ビデオカメラの撮影する映像を学内に流すことである。学内端末機を設置する部屋は、予算ともならみあわせて別掲のような案がきまっている。また、委員会では将来には各教室にも端末機が据付けられる時が来ることを予想して、そのための基本的な配線はこのたび行っておこうと考えている。

考えの発端が視聴覚教育委員会の長期計画にあったとはいえ、それが案として認められ、予算を与えられ、実行に移されるにあたっては、学内の大勢の方々の理解と尽力があった。設備が出来上って満足に運営されて行くためにもまた、同じように大勢の方々の理解と協力が必要である。建設的な御意見をお寄せ頂きたいと思う。

(1987. 10. 6)



〈事前調査時のソヴィエト放送を受信〉

「外国人のための日本語・日本文化夏期公開講座(1987年)」 をふりかえって

——あるいは編集者の注文どおり、その「顛末記」——

留学生別科 山口 幸 二

大学の夏期休暇中に「公開講座」実施!! となると、なんと優雅な(?)、さすが余裕(実際の声は、ご苦労さんなことで)などと思われかねないが、現実、タイトルの「ふりかえって」などという余裕はいま全くないのである。「講座」が終ったのちの膨大な関係資料も山積みのままなのである。

秋学期からは今まで最高の190余名の留学生を受け入れねばならず、そのためのカリキュラムが夏期休暇中にも留学生別科総力をあげて、「講座」開講と同時に検討されねばならなかったし、いまなお受け入れ体制の方は準備進行中で、猫の手どころか足も借りたいぐらいなのである。

因みにいま、赤や黒やの色で恨めしげに書きなぐられた手帳の日付を追ってみると、7月23日授業終了、24日、25日補講、28日夏期休暇開始、28日教室会議、8月3日教室会議、6日またも教室会議、13日またも教室会議、17日から28日までこの「公開講座」、講座中の21日教室会議(ちょっと手が疲れたので、1回ぐらい……会議を抜かしているかも知れない)、「講座」終了翌29日から31日まで留学生広島への研修旅行、翌9月1日から授業再開、統一試験問題作成と、秋学期カリキュラムつめと、時間割作成と60名に及ぶ非常勤の先生方との連絡、17日統一試験、採点、追試、21日修了者認定会議、25日めでたく春期留学生修了式、この間教室会議あまた、修了していく留学生となごりを惜み、酒を飲む回数、そのうち酔いつぶれること2回……こんなことを一々書き出しているのは、本論に入る前に紙幅が尽きてしまうが、ことほどさようであって、「公開講座」について本当に「ふりかえって」見る余裕は、来年度第3回目開始直前まで無理なのかも知れない。第3回目が開かれなかったら……これはもうふりかえらなくてすむのである。だから、今少しでもふり

かえてみる機会を与えて下さった“AV”編集者に、複雑な思いの感謝の意をささげておきたい。

さて、なかなか本論に入れなくて恐縮だが、ことは私情に及んで更に恐縮だが、7月27日に筆者の実父が急逝し、よんどころなく「講座」のもう一人の責任者大倉先生に多大な負担がかかった。本来ならもっとしっかりした「顛末記」が、大倉女史によってしたためられなければならぬはずだが、女史は目下カリキュラム責任者として多忙を極め、何度お願いしても、「アンタやっとき」とむなしくお答えになるばかり、切を目前に控え、やむなく筆者が、いわば片肺飛行でヨタヨタと書きすすめているという事情がある。従って本文の一切に関しては筆者が責任を負うべきものである。

なにしろ一回の「講座」関係の資料が、ワープロの練達の士が多い留学生別科故か、ファイルにして厚さ1.7cmもあり、各担当の先生方の資料を含めるとなると更に1cmぐらい増え、これが前年度分(初めての試みであったので、この1.5倍cmぐらい増)も見ながらとなると、もうペンは進みがたくなるのである。できるだけ生の資料を使って、臨場感を出そう!!というより、何とか与えられた紙幅をうめることに励もうというのが本音である。

さて、まず資料①(87年度夏期公開講座実施要領)を見て、いやここだけは熟読していただきたい。本講座についてこれ以上何をつけ加えることがあろうぞ! しかしここで終る訳にはいかない。今本論に入ったばかりだから。すでに述べたように本年の「講座」は昨年(1986年8月4日~15日)に続いて2回目である。昨年は日本語そのものの学習が目的であったが、本年は「日本のことばと文化」が講座のタイトルで、日本語を学ぶにあたっての文化の学習に重点をおいたものにした。

従って日本語（昨年）と日本文化（本年）の公開講座の基礎が形づくられた訳で、もしこれからも継続が許されるなら、これをより充実発展させる方向になるであろうし、昨年と本年はまことに基礎づくりとして、いわば産みの苦勞があった訳である。

場所を本部棟会議室にしたのは、まことに単純な理由で、B棟留学生別科の教室に冷房設備がないからである。古ボケタ扇風機ではとてももたないからである。従ってビデオデッキとテレビ各2台をB棟から本部棟へ移動させてやるという炎天下の筋肉労働が加わった。来年も、となると多少筋肉トレーニングを心がけておかねばならない。

次に資料②は予算的問題である。これから公開講座を計画される際の参考にでもなればと思い掲げておこう。何故か本年は決定がずいぶん遅れ、ために当初計画での実施時期を我々の能力と準備上8月後半にずらさざるを得なかった。因みに表の45万→36万とあるのは、要求額45万円がいつも簡単に36万円に減額されているという恨めしい矢印である。

ついで内容にかかわるのが資料③-a, bである。表でみると割合すっきりまとまっているようだ。このテーマ設定には担当者のカンカンガクガク（いまもってこの漢字がかけない）の議論と教材作成、video作成、収集の涙ぐましい努力があったこともつけ加えておくべきであろう。しかし逆にいうと、我々の日頃の日本文化に関するvideo等の収集への努力の不足を痛感することにもなった。なお、初中級の「冠婚葬祭」では、同寮山本氏ご本人の荘重な神前結婚式のvideoテープ（何故か一部始終videoに収められていたのです）を使わせてもらった。本人は極めて羞恥心の強い男だが、「教育のためだ」の一喝でケリがついた。もちろん著作権料は払っていないし、そのつもりも予算もない。

もう一度なお、このテーマの講師が奥西先生であったことも因縁めく。かれはこの一年ご尊父を含めて数回Funeralを経験していた。またまたなお、筆者自身、この間の親父のをvideoにとっておいたら……などと涙もかわかぬうちにチラッと思わせられる程の強烈な職場ではある。

本講座にかかわった講師は専任9名、非常勤11名であった。休暇中の非常勤の先生になんとか時間をやりくりしてもらうとか、休暇中でもあり、準備中のやりとりは大変であった。実施決定から十分な準備

期間はなかったが、万端整えて、いや整えたつもりで、いざ8月17日の初日に突入。大会議室の冷房がうまく作動してはず（1クラスはここを仕切って使用）、ここで一番バッターの筆者と受講生は「暑い」を連発しつつ、今に涼しくなるだろうと汗と闘いつつ必死に授業、そのうちに時間となる。あとで聞くと、どこかが送風になっていた由、ナゼダ！室内のスイッチあちこち触りまくったのに、未だミステリー。この日は給料をもらうのも忘れた。

さて、受講生の顔触れは、申し込み者数、初中級12名（アメリカ3、フィリピン2、インドネシア、インド、エジプト、中国、香港、ケニア、韓国各1）、中上級16名（韓国2、アメリカ2、エジプト2、中国2、香港2、アイルランド、カナダ、イギリス、スイス、フィリピン、インド各1）、留学生（主に阪大）、外国人講師、その他一般と多彩、そして、若干のキャンセル、クラスの移動があって、初中級修了者11名、中上級修了者11名であった。わが留学生別科の学生で「講座」に参加したのは2名、夏期休暇はやはり自分の課題でもって過ごしたのであろう。

もうそろそろ筆者の意図どおり、資料のスペースのおかげで、予定紙幅はもう僅かなはずだ。これから書く分は余計なことで願わくばボツになることを祈る。

「講座」の最終日、この夏法事と講座と教室会議のため家族の団ラン（この漢字もむずかしい）を欠いた筆者を尻目に、家族は魚釣りに行くという。家庭の危機を背負った憐れな中年男は、ハムレットになる。一緒につれていってもらって家庭の危機を脱すべしか、講座のしめくり、修了証書ももらう受講生の笑顔を見に行くべきか。ただし後者にはあとかたづけ、テレビ等の移動という筋肉労働つきである。……

家人は高速道路をぶっ飛ばしている。筆者は、受講生の笑顔と、ああこの講座も〇〇国の△△大学のような世界中から集まるセミナーになると困るナァ……などとアホなことを思いつつ、いざたなく誕なぞをたらしながらねこんでしまっていた。

1987年10月11日

'87年度夏期公開講座実施要領

1987年 7月28日 留学生別科

資料①

1. 概要

- (1) 本講座「外国人のための日本文化夏期集中講座」は、文部省社会教育局の予算で実施するものです。
- (2) 本学では、教務課教務係が所轄担当するものですが、実施の便宜上、教務課留学生係が受講生の受付・問い合わせの窓口になっています。
- (3) 留学生別科は、講義内容を決定し、それを実施いたします。

2. 講座の目的

日本語を学ぶにあたって必要と思われる日本人と日本の社会についての知識の一端を教授することにより、日本語学習に資することを目的としています。

3. 受講生

- (1) 留学生だけでなく一般の外国人をも対象としております。
- (2) 受講生は、初中級レベル15名、中上級レベル15名の2クラスに分けて募集します。
- (3) 初中級とは、留学生別科初級の7月授業終了時の日本語レベル相当者を対象にしたクラスです。
- (4) 中上級とは、留学生別科の中上級レベル相当の日本語力を持つ者のクラスです。
- (5) 受講申込のしめきりは8月10日(月)ですので、受講生名簿は10日以降になります。

4. 講座開催時期および場所

時期 8月17日(月)～8月28日(金) (土・日を除く10日間) 午前9時30分～午後12時30分
場所 大阪外国語大学本部棟会議室(両クラスとも)

5. 使用機器

ビデオデッキ VHS型 (両クラスとも)

資料② 外国人のための夏期公開講座について

	61年度	62年度
実施決定時期	4月4日	5月20日
外大通知受付	4月28日	6月12日
実施期間	8月4日～15日	7月27日～8月7日
予算額 講師謝金	39万円→36万円	45万円→36万円
講師補助	3万円→0円	0
講師旅費	30.8万円→0円	11.7万円→1.2万円
校費	29.8万円→9万円	60万円→10.8万円
講師謝金/1時間	6800円→5000円	

資料③-a

公開講座「外国人のための日本文化夏期講座」日程表

——初中級コース——

日	テーマ	講師名
8月17日(月)	日本の四季と行事	山本 進
18日(火)	冠婚葬祭	奥西 峻介
19日(水)	教育	永田 均
20日(木)	サラリーマンの生活	茂 益代
21日(金)	宗教生活	頓宮 勝
24日(月)	女性・老人問題	窪田 幸子
25日(火)	生活様式	角道 正佳
26日(水)	新しい日本・古い日本1	大倉美和子
27日(木)	漢字・ことわざ	吉村 近男
28日(金)	新しい日本・古い日本2	小林 明美

資料③-b

公開講座「外国人のための日本文化夏期講座」日程表

——中上級コース——

日	テーマ	講師名
17日(月)	ことわざ—数字に関するもの	山口 幸二
18日(火)	ことわざ—季節に関するもの	田島佐和子
19日(水)	ことわざ—頭・顔・面・首に関するもの	小矢野哲夫
20日(木)	○「敬語のきまり」のうち の「敬語の種類」と「『オ』 のいろいろ」テキスト	澤田田津子
21日(金)	○「敬語のきまり」のうち の「人のよびかた」 「敬語の使い分け」	生森 将人
24日(月)	○「職場の敬語」の「部内 のことばづかい」のうち 「上下の序列の間で」 「職場の身分敬語」 「接客のことばづかい」 のうち 「職場の身内」 「接客敬語」	川上 恭子
25日(火)	○「職場の敬語」の「接客 のことばづかい」のうち	

〈ことばの不法〉
 〈電話と敬語〉
 「敬語のテスト」から選
 択した部分 斎藤 秋子
 26日(水) ことわざ一目・口・耳に

関するもの 矢野 隆子
 27日(木) ことわざ一胸・腹・手に
 関するもの 古河 幹夫
 28日(金) ことわざ一人生観・人間
 関係に関するもの 長島 貞樹

私家版『大連日誌』

ポルトガル・ブラジル語学科
 林 田 雅 至

●自分の体臭が、にんにくその他豊かな香辛料のせいで、風呂上がり湯気の立ち込める中、ほんのりとスパイスの香りを帯びていることに気が付いたのは、大連に着いて、肉体が土地の水に順応するために必然的に引き起こす下痢症状を経験して漸くおさまりにかけた3週目の月曜日だったと記憶している。2ヵ月を経過した今、肉体は順応しても、僕の視覚はまだ十分にこの大陸を捉えているとは言えない●2月27日、夕方大阪空港をあとにして、上海経由予定通り9時30分北京に到着した。上海からは国内線に切り替わり、国際線の雰囲気とはがらりと変わってしまった。さながら夜行列車の風情である。思い思いの荷物を抱え込んだ土着の様々な民族の人たちが、ガヤガヤとそしてドカドカと乗り込んできた。土の香りが嗅覚に鋭く刺激を与えてくれる●北京の初日、清代の長編小説『紅樓夢』の世界を再現した大観園に案内されたが、デリケートで、空間分割の見事な日本庭園に比較すると、より即物的であり、グロテスクの感さえある。面白かったのは、車のガラス越しに見える往復の街並であった。いくら目を擦っても、天然色でありながら、僕を乗せた車を取り巻く回りの景色は、どうしても瞳孔にセピア色の光と影しか映し出さないのである。街路樹の間を擦り抜けるように走り去る自転車の群れと、それらが地面に落とし光と戯れる影と、行き交う群集と、また集散を反復するばかりで決して同じ顔触れではありえない疎らな人々の群れと、それらが緋い交ぜになった総体としての姿は、あたかも映画のスローモーション撮影のようにゆっくりとしたスピードでしか流れていかないのである。この頃になってやっとその速

度は、僕の肉体の中で、正常値を示すようになった●暇でぼんやりしている時、BBC交響楽団ピエール・ブレーズ指揮、ヘザー・ハーバーのソプラノ独唱による、ラベルの歌曲『シエラザード』の第1曲『アジア』に耳を傾けて、專家楼（この言葉は、僕たち6人がprofessor in residenceであることを確認させてくれる）の4階の部屋から、裏手の急勾配の坂道を上り下りする中国人の老若男女、そして工事現場へ向かう大型のトラック・乗用車を見ていると、確かにその歩調とスピードは僕にとってノーマルなもので、正確に打ち続ける心臓の鼓動とある意味で共鳴して、僕の皮膚に微妙な響きを伝えている。そしてある刹那には、視覚的にしか掴んでいない筈の窓越しの喧噪が不思議にも、テープレコーダーから溢れ出る歌姫の声を共鳴板にして激しく僕に襲いかかってくる。そういう現実的で聴覚的な感覚とは裏腹に、目に描出される流動的な様々な像は、僅かに淡い自然色を帯びたに過ぎず、全体として見ればまだまだセピア色の領域を一步も出ないのである。●中国人助教師の一人、顔が小作りで、きゃしゃな体つきのKさんと、つい先日1時間余りゆったりと話すチャンスに恵まれた。僕は毎週月曜と水曜の2回夜6時半から1時間程にわたって、週14時間の正規の授業の他に補習を始めたばかりであるが、テキストには宮沢賢治の『ポラーノの広場』を使っている。僕の担当班とS先生の班の学生28名は既に2年以上日本語を勉強していて、相当高度な日本語を操る。自らのボキャブラリーを駆使して何とか文法という器にきちんと盛ろうとするその健気な美しい姿には容易に心を動かされてしまうのである。Kさん

は、「みんなテキストに関心を示していますよ。」と可愛らしく言う。俳優A氏による素晴らしい朗読も一役買っているのだろう。昨晚の授業でも会話の部分の声色の使い分けの見事さにクラスは沸いた。主観的に、そして主体的に物事を判断せよ、とはS先生が生徒に対して口癖のように言う言葉である。僕としても、この補習がそうなるために役に立てばと衷心から願っている●「ところで、今回の日本語の短期集中講座を、僕は国際交流の枠組みの中で考えて大切にしたいと思いますよ。ここでの人材育成を心底から献身的にやっておけば、彼らがこれから15年から20年後中国社会の柱として働く年齢に達した時、必ずその効果は現われてきます。人の感情の機微などは普遍的な性格を有していて、異民族の間でも相互に理解しようとすれば、以心伝心するものです。だから、僕は見え見えであからさまな形ではなく、自然でさり気ない形で、でも《交流》という2文字ははっきりと自覚して、生徒さんに接していますよ。」こんなことを口にするだけでも実は気恥ずかしい、と心中で呟いた。「今日は我が世の春を謳歌する経済大国で、東南アジア諸国、中南米などに対して高飛車な態度で臨んでいます。現在は日本が強国だから、それぞれの国は我慢している。しかし、確実に精神の領域で怨恨(ルサンチマン)は少しずつ蓄積されています。これから20年後日本が、韓国を筆頭とするそ

他の諸国に経済的に凌駕されて、衰退期に入った時、それらの蓄積されて膨脹した怨恨は爆発するでしょうね。それが怖いのです。微力だけれども、そして僕の方ではどうにもならないのは十分に分かっているのだけれども、教育の領域で、そういう怨恨の蓄積に少しでも歯止めをかけたいと考えています。日本で政府の某外郭団体が行なうエコノミスト養成コースを個人的に知っていますが、そこでは、東大・一橋を卒業して一流企業で将来の幹部として活躍する人たちと、東南アジア、中近東、中南米諸国からの留学生がペアになって、大学院博士課程レベルの実践的な授業を受け、卒業論文まで執筆するのです。卒業論文は共同作業。そこで、日本人が、諸外国人の学力不足・教養の欠如を侮辱非難し、相手は日本語が分からないといって、眼前でも悪口を言うのですよ。僕はその似非インテリたちをたしなめたこともあるし、その研修の監督役にあたるS部長にも直接話して、同調の意見を伺っているのです。」ここまで話すと、Kさんは、「中国でも日本から来る技術者は唯我独尊で、非常に威張っています。」と口を開いた。驕れる者は久しからず。物質的な豊かさはどうして精神的な豊かさを育てないのであろうか●Kさんとの関係では、加藤周一、大塚久雄、中谷宇吉郎、今西錦司、湯川秀樹、武満徹、吉田秀和、服部四郎、小林英夫などの優れた評論を



<大連外国語学院にて>

読書会で精読するつもりでいるし、実際その読書会は既に始まっている。「これまで論理的な文章を分析・統合しながら、熟読したことがあまりありませんでしたから、千載一遇のチャンスだと思っていますよ」とすらしとした長身のその中国女は、第一回の読書会で、微笑を口元にたたえながら、真情を吐露した。そして、セピア色の風景をバックにして彼女の姿は、その輪郭をくっきりさせて、僕の目には色彩のついた形で、不思議にも浮き上がってきたのである●教室でHさんは、授業後の歓談中、父親の職業についての質問に、「私の父親は貧農です」とぶっきらぼうに答えた。そのあとすぐに彼女は、先週末、みんなで専門家楼に香りのよい甘口のワインを持参して遊びに来た時、テレビ・ドラマで見た日本兵による老人殺害のシーンを思い起こしてであろう、「私の祖母は大戦中日本兵に殺されました」と付け加えたが、あまりにもさらりと言ったのけたものだから、しかも唇には僅かに微笑さえ浮かんでいたものだから、僕は少し奇妙に思った位、まして怨恨のかけらさえ微塵も見出すことは出来なかった。数日後、廊下で小走りに僕を追いかけた彼女は、英語でexcuse me, forget meと言ったが、日本語で言えなかった所に、あわれを催すささやかな抵抗の気持ちを汲み取らねばならないのだろう●週末になって、僕は、体調をひどく崩してこの数日欠席しているK君を見舞うために、学生寮に足を運んだ。彼は、大丈夫ですと言うが、元気を装ったその態度にはかなり無理があり、見ているだけで痛々しい。彼の部屋までの案内役をつとめてくれたのは、Hさんであった。彼女は後で、彼の部屋に入ったのは今日が初めてです、と恥じらいながら小声で言っていたが、その時は、かいかいしく手持ちの薬をそっと持ってきて、これ良く効くわよ、とでもさも言いた気そうな優しい素振りをして見せた。僕がテーブルの上にあった紙切れにA friend in need in need is a friend indeedと書くと、彼は黙って頷いていた●Hさんに誘われるまま、K君の見舞いの後、彼女の部屋で、二人の医者Tさん、I君とジャスミン茶を飲みながら、楽しく歓談する。僕としては、なかなかにしたたかな中国人を揶揄する意味を込めて、大真面目でreductio ad absurdumに《胡麻すり(この言葉を、生徒さんに教えたのは、同僚のI先生である)》を山東省一円で春先に流行する悪性の伝染病に仕立て、雑談の形で、テキストも丁

度病気に関する章だったから、うまく利用して医学についての多種多様な語彙を教えることができた。他のクラスでもすっかり話題になり、正に《胡麻すり》病(学名Comasurius)はこの一週間、培訓部中を席捲し、研修生68名は一人残らず感染したのである。TさんとI君は、「先生は文学専攻なのに、どうしてそんなに医学に詳しいのですか。」と問うから、ヨーロッパ流行病史を修士論文のテーマにしたことを、その動機なども説明した上で、檢疫(quarantine)・隔離所(lazaretto)が14世紀イタリアに端を発することも含め、病いとキリスト教の密接な関係を明瞭簡潔に解説すると、すっかり感心した様子であった。そして既にホールで始まっていたディスコ・パーティーに二人打ち揃って、部屋を出て行った●僕たち三人が夢中になって、流行病の話題に取り憑かれている間、Hさんはベッドに腰を下ろして、全宇宙に私一人という顔付きをして、しかし満足気に今日配布したばかりの『ボラーノの広場』のテープに聴き入っていた。とり残された僕とHさんは、3人用の8畳程の狭い一室で、窓の向こうに見える夕方の大連の曇の波と照り返る夕焼けの橙色の光線を背景にして、あまり意味のない暫くの沈黙を思い思いに享受したのである。彼女はポツリ、ポツリと話しを始めた。恋人は、北京の某研究所で働いていて、数年後日本から帰国したらすぐにでも結婚したいそうである。「私の誕生日は12月9日で、あの人は同じ月の26日です。」と可愛らしく、恥じらいながら教えてくれた。兄が二人いて、上の兄は応用数学者、昨年学会で九州に半月ばかり滞在したという。下の兄はフランス思想史専攻の大学院生、お前の頭は単純で、子供っぽいから、よく考えなさい、としょっちゅう論されるらしい。そして話題が父親のことになって、僕は、「貧農です」とぶっきらぼうに答えた彼女の顔を思い出しながら……実は文化大革命にS大学を辞職させられ、農村に下った物理学者であったことを聞かされた。悲しそうに、「父は心身ともに疲れ切っています。」と彼女は下を向いたまま呟いた。僕は「そのころ、君は3歳か4歳ぐらいでしたね。」と言いながら、大学時代に独学で心理学を学び、僕が授業中に話した『オイディプス王』に目を輝かせて関心を示した、この漆黒の髪の乙女には、強制退職・一家移動の嫌忌すべき思い出が、はっきりとtraumaとして残っているのだろう……と確信する。そして、祖

母の記憶は確実にそれに重ね合わされることになろう。さっきまで向かい合って坐っていた彼女が、知らぬ間に背を向けて窓の所に立っている。外は既にとっぷりと暮れてしまっている。疎らに点滅する明かりは、魔術にでもかけられたようにセピア色に染め上げられた夜の帳をぼんやりと照らし出している。そ

の中で、くっきりと浮き彫りにされた彼女の姿は、紛れもなく自然色を帯びているのである。僕は急に悲しい気持ちに捕われてしまい、闇の向こうに寺院の鐘の音も、教会の鐘楼の響きも決して聞くことのできないこの大連にいることを一人寂しく思い、無性に癒されぬものを感じるのであった●4月22日記す●

「視聴覚ホール・ビデオ鑑賞会」、及び 「ビデオ教室・名作ビデオ鑑賞会」について

LL係では、木曜日、アセンブリ・アワーにビデオ鑑賞会を開催しています。今年度のこれまでのプログラムと、今後のスケジュールは下記のとうりです。多数の参加を待ちます。

§今後のスケジュール

- (現代秀作シリーズ)
- 10月29日 N. ミハルコフ「機械じかけのピアノのための未完成の戯曲」 (1977)
- 11月12日 T. アンゲロプロス「シテール島への船出」 (1984)
- 19日 P. & V. タビイアーニ「カオス=シチリア物語」 (1984)
- 26日 J.-J. ベネックス「デーバ」 (1981)
- 12月3日 J. モロー「思春期」 (1979)
〔同：特集 ジム・ジャームッシュ〕
- 1月21日 J. ジャームッシュ「ストレンジャー・ザン・パラダイス」 (1984)
- 28日 J. ジャームッシュ「ダウン・バイ・ロー」 (1986)

- 4月30日 A. タルコフスキー「惑星ソラリス」 (1972)
〔黒沢、寺山、海外文学を撮る〕
- 5月7日 黒沢 明「デルスウザーラ」 (1975)
- 14日 寺山修司「さらば箱舟」 (1984)
〔第二次世界大戦後の出発—イタリアン・ネオ・リアリズム〕
- 5月21日 R. ロッセリニ「戦火のかなた」 (1946)
- 6月4日 V. デ. シーカ「靴みがき」 (1946)
〔赤狩りとフィルム・ノワール、ハリウッド〕
- 6月11日 E. ドミトリク「十字砲火」 (1947)
- 18日 N. レイ「理由なき反抗」 (1955)
〔ポーランドからの衝撃〕
- 6月25日 A. ワイダ「地下水道」 (1956)
- 7月2日 J. カワレロウイッチ「夜行列車」 (1959)
〔戦争映画の今昔〕

- 9月17日 大島 渚「戦場のメリー・クリスマス」 (1983)
- 24日 L. マイルストーン「西部戦線異常なし」 (1930)
〔特集 フランス・ヌーベルパーク1 トリュフォー〕
- 10月1日 F. トリュフォー「大人は判ってくれない」 (1959)
- 8日 F. トリュフォー「突然炎のごとく」 (1962)
〔特集 フランス・ヌーベルパーク2 ゴダール〕

§これまでのプログラム

*視聴覚ホール

- 4月23日 「ビートルズがやって来る ヤア! ヤア! ヤア!」
- 30日 「ウーマン・イン・ロック」
- 5月7日 「ザ・ローリング・ストーンズ」
- 14日 「デビット・ボウイ・イン・ジギー・スターダスト」
- 21日 「ハロー・ドーリー」
- 28日 「ドリトル先生不思議な旅」

*ビデオ教室

- 〔ウエルズとタルコフスキーを再び—時期遅れの上映に抗して〕
- 4月23日 O. ウエルズ「市民ケーン」 (1941)

- 10月15日 J.-L. ゴダール「女と男のいる舗道」 (1962)
- 22日 J.-L. ゴダール「男性 女性」 (1966)

〈LL便り〉 過去3カ年のAV資料の利用状況について

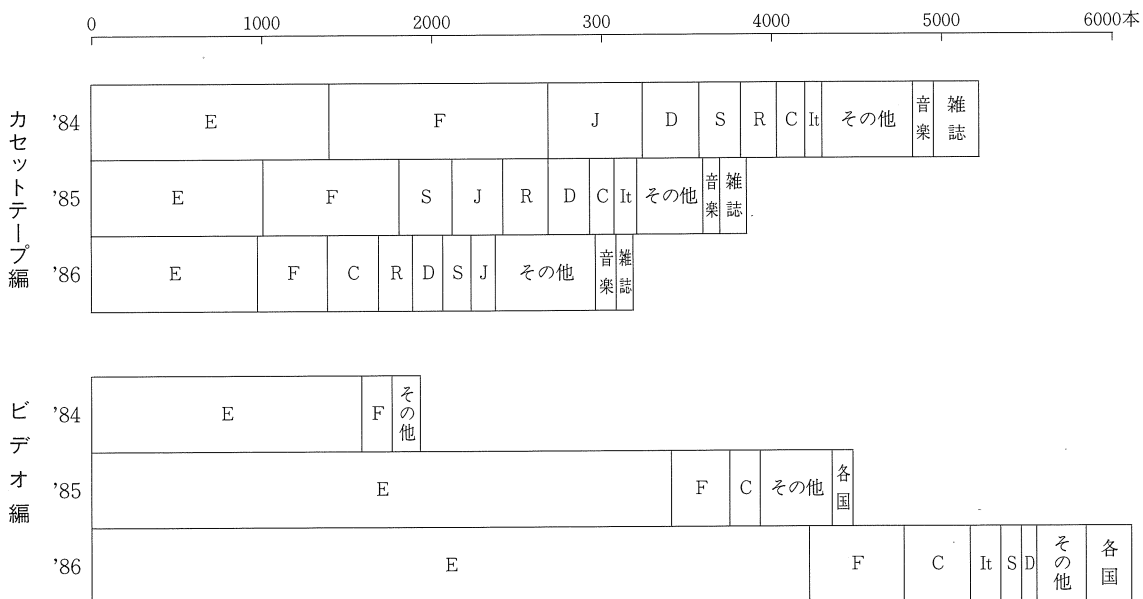
今回は、過去3年間を振り返って視聴覚資料利用状況の変遷をたどってグラフにしてみました。

まずカセットテープとビデオの利用回数を照らし合わせると、この間テープ利用は激減し、ビデオ利用はそれ以上大幅に増大していることがみてとれます。85年度は3階のビデオ自習室が開設された年であり、従来のテレビ2台から個別自習用ブース36席になり、マテリアル自体も充実してきたことが、ビデオ利用倍増の直接の要因となっているとおもわれます。昨年もこの変化の傾向は変わっていません。ビデオの普及という日本社会一般の状況から考えれば、語学学習におけるテープからビデオへの移行は一応納得できるものであり、これからもこの傾向はつづくものと思われます。

つぎに資料内容について、テープ編からみていきますと、英語が相変わらず最も大きい位置を占めていることは予想通りといえます。フランス語のテープ利用が84年から85年で半減したのは、85年から授業用テープをLL係がダビングを一括して受け持つようになったからであり、このことからそれ以外の資料はあまり活用されていないということがわかり

ます。また、日本語のテープ利用が全体に占める位置が年を追って、3位から4位、そして7位まで低下してきていますが、その主要利用者たる留学生の語学学習法がかわってきているのか、その要因については今後調べていきたいとおもいます。ビデオの利用状況についていえば、資料の偏りが大きな影響を及ぼしていると思われます。LLでもなるべく英語以外の資料を取り入れるよう努力していますが、かなり限定されているというのが現状です。利用者側に視点をおくと、英語の劇映画指向は変わりませんが、86年には前年に比べてそれ以外の映画、各国の視聴もわずかながらふえています。

LLの所蔵資料はテープ、ビデオとも年々拡張していますが、以上のようにビデオ、特に映画に利用が集中する傾向が顕著になってきています。語学学習だけでなく、それら通じてその言語圏の文化を知ることに関わっているのではないかとおもわれますが、まだまだフルに活用されていない資料がテープ・ライブラリーに眠っていますので、そうした資料がもっと利用されればよいと思っています。



○ビデオ編概略分析 (数字は利用回数)

〔英語〕 Top3 の行方

年度	順位	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位
'84		炎のランナー 62	ローマの休日 57	マイ・フェア・レディー 50		
'85		マイ・フェア・レディー 138	カサブランカ 111	ローマの休日 103		
'86		風と共に去りぬ 106	(新着)アマデウス 100	スティング 96	4 位 95	5 位 93

〔フランス語〕 根強い人気? ('84→'85→'86)

ラ・ブーム 30→38→30
 シェルブール 32→28
 男と女 23→10→25

フェリーニ：甘い生活 18, そして船は行く 15
 ヴィスコンティ：ルードヴィヒ 15

〔中国語〕 授業とカンフー ('85→'86)

上海にかかる橋(授業の効用) 90
 小林寺2 48
 プロジェクトA 45→34

〔スペイン語〕 エリセ VS サウラーガデス

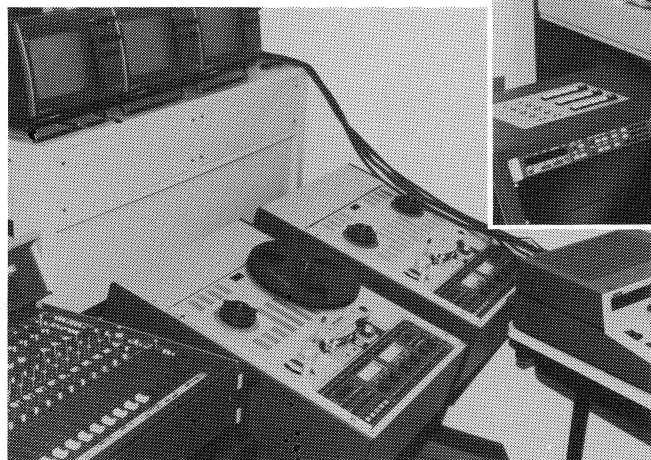
エリセ：ミツバチのささやき 33, エル・スール 1
 サウラーガデス：カルメン 19, 血の婚礼 9

〔イタリア語〕 がんばる監督

デ・シーカ：ひまわり 28, 自転車泥棒 23

〔ドイツ語〕 戦争を巡って

1 位 会議は踊る 20
 ブリキの太鼓 20
 2 位 マリア・ブラウンの結婚 17
 3 位 Uボート



〈スタジオ内MAシステム〉

テープ・ライブラリー、LL自習室利用状況統計表 (1986年4月～1987年3月)

(カセット・テープ)

順位	利用者所属	利用者数	利用指数 (利用者数 /在籍者数%)	月別利用者数											
				4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3	
1	英語科(621)	629	101	46	97	76	50	62	64	96	37	34	53	14	
2	フランス語科(326)	627	192	49	100	135	84	52	50	40	44	30	30	13	
3	中国語科(396)	342	86	48	75	37	35	23	18	20	15	18	28	25	
4	ロシア語科(372)	328	88	23	85	21	26	24	28	11	19	43	51	0	
5	スペイン語科(397)	278	70	37	45	29	47	11	19	22	34	13	28	0	
6	留学生別科(前37 後128)	39 169	105 132	1	7	3	15	13	15	24	41	23	42	27	
7	ドイツ語科(179)	195	109	18	27	14	50	18	30	10	19	11	16	12	
8	アラビア語科(158)	194	123	8	26	20	28	20	9	21	6	2	11	25	
9	朝鮮語科(79)	126	160	10	17	37	18	8	18	11	3	0	1	3	
10	インド・パキスタン語科(161)	116	72	15	13	9	9	2	19	1	35	0	9	0	
11	ポルトガル・ブラジル語科(97)	84	87	4	6	5	20	12	5	10	16	5	1	0	
12	ペルシア語科(82)	80	98	0	17	19	11	3	12	2	9	2	4	1	
13	イタリア語科(139)	70	50	5	17	6	2	8	6	9	3	9	5	0	
14	モンゴル語科(73)	59	81	21	11	6	10	3	0	0	3	2	3	0	
15	タイ・ベトナム語科(81)	54	67	17	7	7	3	6	2	1	3	2	5	4	
16	インドネシア・フィリピン語科(128)	42	33	0	3	5	0	1	2	0	1	14	10	10	
17	デンマーク・スウェーデン語科(89)	40	45	4	2	9	5	5	2	0	0	0	16	0	
18	ビルマ語科(69)	32	46	0	5	6	3	1	4	6	2	2	3	0	
19	その他	120		2	22	5	12	8	26	4	6	18	17	0	
合計 (3,687)		3,512	95	308	572	449	428	281	329	288	296	229	334	134	

(ビデオ・テープ)

順位	利用者所属	利用者数	利用指数 (利用者数 /在籍者数%)	月別利用者数											
				4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3	
1	英語科(621)	758	122	49	107	121	72	37	89	91	36	66	88	2	
2	留学生別科(前37 後128)	157 530	424 414	13	73	42	21	8	61	41	30	81	160	157	
3	中国語科(396)	674	170	42	87	135	67	42	73	69	21	44	66	28	
4	フランス語科(326)	593	182	60	107	100	49	35	56	70	24	41	49	2	
5	ロシア語科(372)	565	152	23	65	133	57	33	81	71	20	31	51	0	
6	スペイン語科(397)	523	132	14	66	132	71	24	48	37	24	50	52	5	
7	アラビア語科(158)	390	247	26	83	58	40	25	39	77	8	20	14	0	
8	ドイツ語科(158)	389	446	26	54	70	28	16	25	57	24	32	42	15	
9	イタリア語科(139)	266	191	10	36	52	22	24	27	36	16	22	19	2	
10	タイ・ベトナム語科(81)	220	272	14	34	17	25	12	42	46	6	5	19	1	
11	インド・パキスタン語科(161)	208	129	4	55	24	18	44	25	2	0	10	19	7	
12	ペルシア語科(82)	172	210	15	33	42	18	7	10	23	5	5	13	1	
13	インドネシア・フィリピン語科(128)	163	127	20	25	17	2	5	27	27	18	16	14	0	
14	モンゴル語科(73)	156	214	20	38	25	8	7	9	15	2	9	22	1	
15	デンマーク・スウェーデン語科(89)	141	158	12	34	19	20	7	16	9	14	4	6	0	
16	朝鮮語科(79)	131	166	9	10	18	24	3	21	19	2	11	10	4	
17	ビルマ語科(69)	123	178	8	8	30	22	2	27	10	5	5	6	0	
18	ポルトガル・ブラジル語科(97)	98	101	15	26	12	6	4	14	16	2	1	2	0	
19	その他	51		4	5	6	19	2	4	5	2	2	0	2	
合計 (3,687)		6,255	170	384	946	999	589	337	686	721	259	455	652	227	

○カセットテープ編

分 類	言語コード	総利用回数
英 語	E	984
フ ラ ン ス 語	F	394
中 国 語	C	297
ロ シ ア 語	R	188
ド イ ツ 語	D	179
ス ペ イ ン 語	S	177
日 本 語	J	147
ア ラ ビ ア 語	A	95
西 洋 諸 語	Z	72
イ タ リ ア 語	It	67
ポルトガル・ブラジル語	PB	66
朝 鮮 語	K	63

ペ ル シ ア 語	P	53
東 洋 諸 語	Y	51
モ ン ゴ ル 語	M	24
ヒ ン デ ィ ー 語	H	23
ベ ト ナ ム 語	V	21
ウ ル ド ウ ー 語	U	14
デ ン マ ー ク 語	De	14
ビ ル マ 語	B	9
イ ン ド ネ シ ア 語	In	9
タ イ 語	T	8
音 楽	X	97
雑 誌		110
総 計		3,162

○ビデオ編

<映画編>

分 類	言語コード	総利用回数
英 語	E	4,202
フ ラ ン ス 語	F	546
中 国 語	C	377
イ タ リ ア 語	It	177
ス ペ イ ン 語	S	109
ド イ ツ 語	D	104
朝 鮮 語	K	71
ロ シ ア 語	R	70
ヒ ン デ ィ ー 語	H	36
フィリピン語	Ph	24
スウェーデン語	Swed	15
トルコ語	Tr	13
ポーランド語	P	12
日 本 語	J	11
ポルトガル・ブラジル語	PB	10
ア ラ ビ ア 語	A	7
タ イ 語	T	7
モ ン ゴ ル 語	M	5
ビ ル マ 語	B	4
ベ ン ガ ル 語	Bg	3
チ ェ コ 語	Cz	3
ペ ル シ ア 語	P	2
ハンガリー語	Hung	1
音 楽	X	26
合 計		5,835

<各国編>

分 類	言語コード	総利用回数
日 本	J	102
中 国	C	60
ア ジ ア	As	33
ス ペ イ ン	S	16
ビ ル マ	B	11
ロ シ ア	R	8
英 ・ 米	E	7
モ ン ゴ ル	M	7
ド イ ツ	D	6
ヨ ー ロ ッ パ	Eu	6
フ ラ ン ス	F	5
ベ ト ナ ム	V	5
ポルトガル・ブラジル	PB	4
イ ン ド ネ シ ア	In	3
イ タ リ ア	It	3
朝 鮮	K	3
フィリピン	Ph	2
ア フ リ カ	Af	1
ペ ル シ ア	P	1
ウ ル ド ウ ー	U	1
合 計		284

総 計		6,119
-----	--	-------

1987年度 LL授業時間割表

	教室	I	II	III	IV	V	1	2
		9:10~10:40	10:50~12:20	13:10~14:40	14:50~16:20	16:30~18:00	18:20~19:40	19:50~21:00
月 MON	4-I		P2 ラジャブ	E スターク	E2A スターク	F2 熊野	F 小沢	C 上神
	4-II		Pi2 コイズミ	Pi コイズミ	R1A 生田	R 生田	R 生田	E 上田
	5-I		F3・4 大木	J 梅田	F1 大木	F3,4 小沢	F 大木	F 小沢
	5-II			B2 エーベ			E 正木	D 友田
	V.R. V.R.(D)	H2 溝上	K1 金		K2 金			
火 TUE	4-I		A イサム	E2 スターク	D1 高田(博)			
	4-II	U1 タバッサム	H1b マーラビヤ	M1 ルハックヴァー	M2 ルハックヴァー			
	5-I	B2 南田	B1 南田	E1A 舟阪	K2 永井			
	5-II		K2 藤戸	F ボロー	F ボロー	F4 ボロー		
	V.R. V.R.(D)		K3,4 金		K4 金	C3,4 杉村		
水 WED	4-I	SD1 ビスタム	E 深山	D 高田(珠)	C 上神		S 大内	D 高田
	4-II	R2ab サンニコワ	V1 富田	P1 ラジャブ	D 高田(珠)	P ラジャブ		D 時田
	5-I		S2 アルバレス	S アルバレス	Dm アナセン			
	5-II	F ボロー	F ボロー	C3,4 上神	S アンバレス	It 郡		E 正木
	V.R. V.R.(D)	PH2 津田	PH ルンベラ		PH ルンベラ	R 桜井		
木 THU	4-I	E2 斎藤(隆)	V2 富田		In アイブ	C1A 中山		
	4-II	C1 杉村	H1a マーラビヤ		Dm1 アナセン	In2 アイブ		
	5-I	E1B 舟阪	Dm3,4 アナセン		Dm3,4 福居	D 杉谷		
	5-II	IT アミトラノ	B3,4 エーベ					
	V.R. V.R.(D)	R2ba サンニコワ	C2B 杉村 R2aa サンニコワ	「鑑賞シリーズ」				
金 FRI	4-I	D2 乙政	PB1 河野	C2a 上神	E 森岡	E3 斎藤(隆)	E ドランス	E ドランス
	4-II	PB2 東	C2b 上神	R2bb サンニコワ	It 郡	C 青野	E 田路	
	5-I		E3 船山	SD ビッヒマン	SD2 ビッヒマン			
	5-II	F1B ボロー	F1A ボロー	K1 永井	D 友田	C 上神		It 郡
	V.R. V.R.(D)	PH2 津田	PH ルンベラ					
土 SAT	V.R.(D)	R3ab サンニコワ	R3b サンニコワ					

視聴覚ホール 水 保健 松下 木III 「ビデオ鑑賞シリーズ」
木I 美学 長尾 金V It 郡

編集後記

- ◇ Audio Visual Journal 第12号をお届けします。
10月14日には、「海外放送受信システム」の導入が決定し、今年度中には大きなパラボラアンテナが学内各所に設置されることになるでしょう。
- ◇ 「海外放送受信システム」とは、静止衛星により、米国、ソ連、中国等のTV放送を受信し、リアルタイムな映像を学内に放映するシステムであり、本学における外国語教育・学習の効果

的な環境を日常化しようと考えたものであります。
(全体概念図参照)

AV Journal 一第12号一

1987年10月28日発行

編集 大阪外国語大学視聴覚教室委員会
附属図書館視聴覚資料係
発行 大阪外国語大学
印刷 (株) ムラタ印刷